

安部公房「ノアの方舟」論

— 「方舟思想」への批判を中心に

顧 琦 淵

はじめに

「ノアの方舟」は安部公房が昭和二十七年（一九五二）年一月号の『群像』に発表した短編小説である。

その内容は、村長ノアの暴政により家族を失い、村から脱出した語り手「私」が再び村に戻り、廢墟と化した村、ひとりになったノアと建設途中で放棄された方舟を前に二度と帰らないと決心し村を去った、というものである。

「ノアの方舟」は旧約聖書「創世記」に登場するノアの伝説を素材に創作した小説であるが、その創作背景には作者安部公房がノアの伝説に対する強い関心があった。一年程前に発表した小説「S・カルマ氏の犯罪」と「洪水」それぞれ最後の部分において安部はすでにノアを二度登場させている。「ノアの方舟」という作品は、長らく強い関心を持っていたノアの伝説に対する考えを新た

にまとめたもので、研究する価値は大いにあると言える。

管見の限り小説「ノアの方舟」に関する先行研究は李先胤の論^①しかない。氏は「S・カルマ氏の犯罪」と「洪水」に書かれている「ノア」に関するエピソードを分析し、「宗教的権威を借りて政治的・倫理的正当性を保持しようとする」という両作品に共通する「ノア像」を見出した。^② そのうえで、さらに小説「ノアの方舟」の内容を整理し、「このノアという人物は、安部公房の他のテクスト内のノア像と類似した形で造形されている」と主張する。ここでいう「類似した形」とは小説「ノアの方舟」での「ノア」が「宗教的権威を借りて」村民を統治したところであると考えられるが、「ノア」が具体的にどのような「宗教的権威」を利用し、村民に納得させたのかについては文中でほとんど触れていない。「ノアの方舟」における「ノア像」というものを改めて考察する必要がある。また李先胤は「村の荒廢化の原因」を「ノアによる暴力的な政治」

にもとめたが^③、問題なのはむしろ「ノアによる暴力的な政治」がなぜ長く続いてこられたのかであり、これについても氏は言及していない。

李先胤の研究は、「ノアの方舟」と他の作品に登場するノアに共通するイメージを見出し指摘したことに大きな意味があり、評価すべきだが、小説「ノアの方舟」の研究だけを取り上げて言うとは、まだ作品に深く切り込んだものとは言いがたい。前述したように、作品「ノアの方舟」における「ノア像」や、「ノア」の統治の仕方、そして作者安部公房がこの作品で伝えようとしたもの、というような謎がまだ解明されていないままなのである。

これらの問題を解く重要な手がかりとして、本稿はまず作者安部公房の作品に関する言及を取り上げたい。

前述したように、「ノアの方舟」という作品は安部公房が長らく強い関心を持っていたノアの伝説に対する考えを新たにまとめたものである。実際、この作品について安部公房は昭和三十（一九五五）年に書いた評論「方舟思想——映画『生きものの記録』」で次のように述べている。

ところで以前、私もノアの伝説については短編小説で書いたことがあった。前々からノアなる人物について、割り切れたぬ疑問を持っていたためだ。（中略）なぜ彼らだけが生き残るにあたいするものとして選ばれたのか。なぜ彼らだけが方舟

に乗って逃れることを許されるのか……。

私はこの方舟思想の根底にあるものの正体を捕まえようと、小説を書いた。（中略）私はノアを否定的にとらえることで、新方舟伝説をつくった。^④

ノアの伝説に対する安部の一歩の関心は「方舟思想」、すなわち伝説に見られる、ノアが選ばれるものとして彼とその家族だけが洪水から逃れる特権を持っているという考えであり、それを徹底的に解析するために小説「ノアの方舟」を書いたのである。安部が述べるように、彼はノアを否定的にとらえることで、「新方舟伝説」をつくった。

では、安部公房は旧約聖書「創世記」にあるノアの伝説をどう考えていたのか、小説「ノアの方舟」で具体的にどのような「ノア像」を作り上げ、「新方舟伝説」を組み立て「方舟思想」を表現しようとして、そして「方舟思想」をどう批判したのか。「方舟思想」をキーワードとして、本稿は以上の問題を明らかにしたい。

なお、本文テキストは、『安部公房全集^⑤』に載せられているものを使用する。

一 安部公房のノアの伝説に対する批判

まず旧約聖書「創世記」にあるノアの伝説を簡単に整理しておく。

人間の悪に神エホバは悲しみ、人を造った事を悔い、人間を含む地上すべてのものを洪水で絶滅することを決める。しかしノアはエホバの恩恵を受けた。ノアは「義人にして其世の完全き者」⁶で、セム、ハム、ヤベテという三人の子供をもっている。エホバはノアに洪水のこととそれに耐える方舟の作り方を教え、家族と各種の動物を二匹ずつ方舟に連れ込むことを命じた。ノアはエホバの命に従い、方舟で大洪水から生き残った。そして再び地上に戻ったとき、ノアは祭壇を築いてエホバを祭り、ノアとその子孫にエホバは万物を支配する権利を与え、大洪水が再び起こらないことを約束する。

その後ノアは農夫となり、葡萄を植え始めたが、葡萄酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になる。ノアの子供の一人であるハムがそれを見て二人の兄弟に告げる。セムとヤベテとは着物を取って、うしろ向きに歩いて、父の裸をおおい、顔をそむけて父の裸を見なかった。ノアが酔いから覚め、息子たちがしたことを知り、ハムの子孫がその兄弟たちのしもべとなることを呪い、セムとヤベテがエホバの恩恵を受けると祝福する。その後三兄弟とその氏族は別れて世界に広がり、それぞれの地方に住み始める。

安部公房は「方舟思想——映画『生きものの記録』」でノアの伝説が大洪水が去るまでの流れと大洪水の後の流れと前半部、後半部に分けて論じている。

前半部分について安部公房は次のように述べている。

ノアの行為（筆者注…ノアとその一家だけが方舟に乗って逃れること）が正当化されるのは、ノア一家を除いた全人類の否定にあるのだということだった。人類の墮落という前提によって、ノアの伝説ははじめて倫理的普遍性を持ちえたのだ。これは一種の道徳上の弱肉強食説である。（中略）私はノアが神に対して一言も抗議の言葉を発せず、唯々として方舟つくり精を出し、しかも伝説が彼に対して一言もひなんの言葉をなげかけてはいないことについて、まるで納得がない。ノアのやったことなど、少々キボが大きいというだけで、要するに抜け目ない相場師のやり口と同じことではないか。⁷

ノアが神から特別に選ばれたものとなり、ノアとその家族だけが洪水から逃れる特権を持ちえた理由、「方舟思想」の正当性はどこにあるのか。聖書の「ヘブル人への書」には次のようなことが記されている。

信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。⁸

ノアが選ばれた理由はノアの神エホバに対する信仰にあると説

明している。このような考えに対して、安部公房は「ノア一家を除いた全人類の否定」、「一種の道徳上の弱肉強食説」と評している。つまり墮落した全人類は道徳上の弱者で、神エホバを深く信仰するノアは道徳上の強者にあたる。洪水とは神エホバによる選別、淘汰であると安部は考えているのだ。さらに安部はノアがエホバの命に抵抗せずと受け身の立場を取っていたことを強く批判し、ノアを「抜け目ない相場師」と揶揄する。

続いて、安部は大洪水の後の伝説について次のように述べている。

事実ノアの一家は、エホバが考えたように新しいよい人類の祖先たるにふさわしい連中ではなかったようだ。いい葡萄園の農場主だったノアはやがてアルコール中毒にかかり、家庭紛争がたえず、一家離散し、間もなく彼らの名前は伝説の中から消えてしまうことになる。この結末こそ実に暗示的であるのに、伝説はなぜかあまりつつこんでは語っていない。⁹⁾

実際「創世記」に記される伝説の後半部分と比べて、引用文で安部公房は明らかにノアの過ちを誇張した。しかしノアが酒に酔い醜態をさらしたことは確かに「義人にして其世の完全き者」というノア像にそぐわないエピソードと考えられる。安部は伝説の後半部分こそがノアひいてはノアの特権を支持する「方舟思想」

を批判する「暗示的」なものが内包されているものとして注目し、小説「ノアの方舟」に取り入れた。その「ノアの方舟」について安部は「方舟思想——映画『生きものの記録』」で次のようなことばを残している。

そこで私はノアの伝説の後半部に力点をおいて話を組み立ててなおしてみることにした。私はノアをアルコール中毒の独裁者に仕立て、洪水も発狂しうらぶれ果てた彼の幻覚ということにしてしまった。伝説全体を、アルメニヤの奥まった山村で、廃墟になった方舟の残骸をまえにノアというおいほれ、乞食から聞いた自慢話ということにしたのである。言うまでもなく方舟思想を風刺するためである。¹⁰⁾

安部公房は「創世記」におけるノアの伝説を「アルコール中毒の独裁者」の「妄想」、「自慢話」として作りかえた。その内容についてはまた後述するが、まず注目すべきなのは作中に登場する「ノア」の人物像に関する言及、特に「アルコール中毒」と「独裁者」という二点である。前者は「創世記」伝説にあるノアの酒に酔う、後者はノアが彼に恥をかかせた息子ハムに対して無情な呪いを掛けたことから創作したものと考えられる。

安部公房は古いノアの「方舟伝説」から「方舟思想」を読み取り、その実質を「道徳上の弱肉強食説」として捉えた。このよう

な「方舟思想」を批判するために、「ノア伝説の後半部」にみせたノアの「新しいよい人類の祖先たるにふさわし」くない一面に目を付け、小説「ノアの方舟」で「新方舟伝説」を書いた。では作中で、聖人でなくなった「ノア」にいかの特権を持たせ、「方舟思想」を表現するのか。次章から「アルコール中毒」と「独裁者」という二つのキーワードを中心に考察していく。

二 「ノア先生」がアルコール中毒者である意味

まず「ノア」がアルコール中毒者である意味について考えてみる。

小説で「ノア」は語り手の「私」に「ノア先生」と呼ばれ、閉鎖的な山村の村長で、「村長」や「校長」、「税務署長」、「ブドウ園長」など十二の職を兼任し村民を統治している。いつも突然に人々の前に現れ税金と一リットルのブドウ酒を強要する。それを拒絶する人々に対し、あるいはただ「ノア先生」の悪口が耳に入ったら、すぐ裁判を行い死刑かさらに罰金を徴収したりする。このような統治を支える論理として「ノア先生の教理」が存在している。その教理について村に育った語り手の「私」は次のように説明する。

私たちが学校に入学した時、最初に聞かされるのがその教理で、それから一日一時間ずつ、三年間、繰り返してその教

理を聞かされつづけ、最後に卒業の訓話としてまた書かされる、唯一無二の教養であるわけです。誇張ではなく、それが課業のすべてでした。(中略)それほどの教理であれば、その理解なくして、村の生活は理解できないと言っても、決して過言ではないでしょう。

教理は村の人たちにとって「唯一無二の教養」、学校で習得する「課業のすべて」である。村で生活するために最も重要なもので、その生活を理解するに絶対不可欠である。その最初の部分には自分がお酒を徴収する理由、そして「エホバ」と懇意になるきっかけが詳しく記されている。

さて、その理由(筆者注…お酒を沢山飲む理由)というのは、第一に、当村の重要生産品であるブドウ酒の味を、たえず監督監視するのが私の責任ではなからうか。しかり、そうである。(中略)

ところで、第二の理由だが、わが幼少のみぎり、未来の要職を果たすべく訓練中のことであつたが、やや度をすごしたと思われたころ、突如、私の前に神エホバが現れた次第なのである。そのとき、神は何やら仰せられたが、はつきりしなかつた。後で考えてみると、「ノメノメ」と仰言つたらしい。実にその後、一時に三リットル以上飲むごとにおいてになつ

た。そして、量が増すごとに、お言葉もはつきりしてきた。有り難いことだと、私はますます酒量をますます努力した。ひとえに信仰のいたすところだわい。というわけで、私が諸君を訪ねるとき、必ずブドウ酒一リットルを所望するという規則をつくったことを、有り難く思え。

さて、かような次第で私はすっかりエホバ様とねんごろになり、宇宙創造から人間の掟にいたるまで、くまなく真理を授かったわけ、(中略) 信じざるものは死ね!

「ノア」によれば彼が沢山お酒を飲む理由は二つある。一つはブドウ酒の味を「監視監督する」ため、もう一つは神「エホバ」に勧められたためである。しかもお酒を沢山飲むことよって神「エホバ」と「ねんごろになり」、宇宙の真理を授かることに至ったという。

一方、聖書に於いて、お酒を沢山飲むことは決して勧められるようなことではない。旧約聖書の「箴言」だけでも過度の飲酒を戒める言葉は数カ所取り上げられる。その中の代表的な三つを引用する。

酒は人をして嘲らせ、濃酒は人をして騒がしむ。之に迷わざる者は無知なり。¹¹

酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ。／それ酒にふ

ける者と肉を嗜む者とは貧しくなり 睡眠を貧る者は敝れたる衣をきるにいたらん。¹²

禍害ある者は誰ぞ 憂愁ある者は誰ぞ 争端をなす者は誰ぞ。煩慮ある者は誰ぞ。故なくして傷をうくる者は誰ぞ。赤目ある者は誰ぞ。／是すなはち酒に夜をふかすもの、往て混和せたる酒を味ふる者なり。／酒はあかく盃の中に泡だち滑かにくだる 汝これを見るなかれ。／是は終に蛇のごとく噬み蝮の如く刺すべし。／また汝の目は怪しきものを見、なんぢの心は詭言をいはん。／汝は海のなかに偃すもののごとく帆桅の上に偃すもののごとし。／汝いはん人われを撃ども我いたまず 我を拷げども我おぼえず 我さめなばまた酒を求めんと。¹³

さらに聖書の「ガラテヤ人への書」では、酒に酔う人は「神の國を嗣ぐことなし」とされている。¹⁴ つまり酒は慎むべきもので、酒に酔うと神に見放されることはあつても認められることは決してない。しかし小説「ノアの方舟」では、「エホバ様」は「ノア先生」に「ノメノメ」とひたすら酒をすすめ、「酒量をま」していく「ノア先生」は「エホバ様」とますます「ねんごろにな」る。教理の最初部分だけを見ても、「ノア先生」が語る「エホバ様」と「エホバ様」から授かる教理の内容は聖書のものからかけ離れていることが分かるだろう。

では「ノア先生」が見た「エホバ様」はどこからきたのか。二

人が懇意になるいきさつを記す右の引用文をふりかえつてみよう。はじめ「ノア先生」が「エホバ様」を見たのは、「ノア先生」が幼少の頃、飲酒が「やや度をすぎしたと思われたころ」である。その後「エホバ様」が見えたのはいつも「三リットル以上」という途轍も無い量を「一時」に飲んだ後で、また最初は「はつきりしなかった」「エホバ様」の言葉が、飲む「量が増すごとに」、「はつきりして」くる。

以上のことから総合して考えると、「ノア先生」が酷く酔う時に見た「エホバ」とは幻覚であり、そして彼が語る教理を真理でなく、彼の幻想や妄想が交じった作り話、その統治を合理化するための手段、方便と判断したほうが妥当だろう。逆に言うと、作者安部公房が「ノア先生」をアルコール中毒者にする意図は、「ノア先生」の語る教理の合理性や、後に主張する洪水の到来などの信憑性が低いものであることをあらかじめ示唆するためである。

では「ノア先生」は如何に村民たちをそのようなかがわしい教理に従えさせ、その暴力的独裁的な統治を受け入れ、そして途中で放棄されたとはいえ、方舟を村民に造らせたのか。その中心的な役割をになっているのは「ノア先生」の教理である。

三 「ノア先生」の教理の内容とそれが受け入れられる理由

前述したように、「ノア先生」にたてつくものは大金を支払わされるか、殺される。これについて「ノア先生」の言い分とその言

い分に対する語り手「私」の説明は次のように記されている。

「人間というものは、ある程度どうしても死ななければならん。君たちも知つとるように、一定数の死が、宇宙の調和を保っているのだ。私はそれを調節しなければならない。（中略）」

分からんと言えはすぐ裁判でした。

その言い分は、村の人にはそれだけで十分な説得力を持っているのでした。なぜなら、先生の説く教理に従えば、この言い分も全く合理的だったからです。

そのことを理解していただくためにも、またこれから先にお話するつもりの方舟事件を充分に納得していただくためにも、ここでノア先生の教理をお話しておいたほうがよいのではないかと思われます。

「ノア先生」の統治に従うものはみなその教理に従っている。教理は「ノア先生」の統治を支えるものとして中心的な役割を果たしているだけでなく、また統治の終結の引き金となる方舟の建造と廃棄にも深く関わっている。

「ノア先生」が語る教理について簡単にまとめておく。

すべては「エホバ様」と「サタン様」の誕生から始まった。二人で最初に「上」と「下」の概念を決めたあと、「サタン様」は太

陽を造り、「エホバ様」は太陽から九つの物質を造り、二つ目の物質から地球を造った。さらに長い時間が経って、「エホバ様」が地球にアダムとイヴを作り、地下の管理権を与えると云って「サタン様」を地下に誘い封じ込めた。「サタン様」は人が死んだら魂となって地下にくるという「エホバ様」の言葉を信じているが、いつまで経っても魂が見えないので「サタン様」は怒り悲しみ、涙を流した。その影響で地上に洪水が起りかけると、「エホバ様」は魂がはつきり見えないのは死んだ人の量がまだ足りないから辛抱するようにと云って「サタン様」を慰めた。だから人々の生活を眺めるのが好きな「エホバ様」と死人の数を数えるのをたのしんでいる「サタン様」を喜ばせるため、宇宙の調和を維持し、洪水を起こさせないため、「われわれは適当に死ななきゃならん。そして適当に苦しみ、適当に混乱しなきゃならん」。

小説の最後に「ノア先生」が語った人類を絶滅する大洪水が起こる原因も「サタン様」がついに魂をみるのがなく、辛抱ならなかったためというもので、教理と深く繋がっている。

洪水のことを含めて教理の内容は旧約聖書「創世記」に語る伝説と大きく異なるものである。作者安部公房による「新方舟伝説」、「ノアの方舟」の世界で、「ノア先生」が村を統治する以前の本当の歴史は、「創世記」に記されるものとどれほど一致しているのかは完全に説明することができないが、少なくとも後に触れるようにアダムから「ノア先生」までの世代交代の流れはそのまま存在

している。

「ノア先生」の教理で語られる歴史の流れは前述したように、あくまで「ノア先生」が見た幻想からつくられた、自分の統治を合理化するための手段である。その結論も常識を持つものから見れば非常に荒唐無稽なのだが、教理内部の論理は筋が通っていると云える。逆に言うと、その教理が通用する環境は、いわゆる一般的常識を排した閉鎖的なものでなければならぬ。

実際「私」の説明によると、村は「完全に外部と断ち切られて」いて、「ノア先生」の「息子たちだけ」が「必要があるとき」に「外に出るのを許されている」。ただし村の「労働力が不足している」ため、外来者は「よろこんで迎え入れる」のである。

外来者はみんな最初は村と全く異なる価値観をもっていただろうが、村の管理は徹底的な独裁統治で、村の教理に従わないものはみな裁判にかけられ罰金か処刑されるので、生きるためにはまず教理に従わざるをえない。そして繰り返し教理を聞かされている内に、もとの価値観などを忘れ、「ノア先生」の統治に都合がいい考え方を刷り込まれていくと考えられる。

しかしたとえ村の教理、すなわち宇宙の調和のため、一定数の死が必要だということを村民たちが受け入れたとして、「ノア先生」が一般の人と同じような死ぬ側ではなく、独裁者として死を執行する特権を持っている理由はどこにあるのか。教理に於いて明確に記されていないが、それをほめめかす内容は随所に読み取

れる。

その理由を一言で言うと、「ノア先生」が「偉大」なためである。この「偉大」ということばには二層の意味が込められている。一つは血筋における高貴さで、もう一つは権力の大きさである。

四 「ノア先生」が「偉大」である意味

「サタン様」が大洪水を起こすのを決めたことをの知った「エホバ様」はついに止めるのを諦めたが、「ノア」とその家族が洪水に耐える方舟をつくる時間をくれるように「サタン様」に頼む。

「サタン君、一寸の間だけ待ってくれ。私のために、一つの家族だけを救う暇をくれ。人類の中でもっとも由緒正しく、高貴で偉大なノアの家族が、君の涙に耐える方舟を造るだけの間を。」

「エホバ様」が「ノア」を選んだ理由として考えられるのは、「ノア」が「由緒正しく、高貴で偉大」なためである。旧約聖書「創世記」でノアの血筋については詳しく記されている。

アダムのセツを生し後の齡は八百歳にして男子女子を生り
(中略)セツ百五歳に及びてエノスを生り(中略)エノス九十

歳におよびてカインを生り(中略)カイン七十歳におよびてマハラレルを生り(中略)マハラレル六十五歳に及びてヤレドを生り(中略)ヤレド百六十二歳に及びてエノクを生り(中略)エノク六十五歳に及びてメトセラを生り(中略)メトセラ百八十七歳に及びてレメクを生り(中略)レメク百八十二歳に及びて男子を生み、其名をノアと名けて言けるは此子はエホバの詛ひたまひし地に由れる我操作と我勞苦とに就て我らを慰めん(中略)ノア五百歳なりきノア、セム、ハム、ヤペテを生り。¹⁵⁾(傍線部分筆者)

「創世記」でのノアは確かに「由緒正しい」血筋を受け継いでおり、生まれた時からすでに人類を慰めるものという大役を予言されている。そして小説「ノアの方舟」での教理を見ると、「ノア先生」は自分の血筋の系譜について

アダム、セツ、エノス、カイン、マハラレル、ヤレド、エノク、メトセラ、レメクと代が代わった。
そしてこの偉大なるノアの時代が来たわけじゃ。

というように、「創世記」に記されている流れがそのまま明確に記されている。これがつまり前章に述べた、「ノア先生」は「創世記」でのノアと同じ血筋を辿っている証拠である。「ノア先

生」は自分の高貴な血統を見せびらかし、自分が「由緒正しく高貴」であることを強く主張している。また本稿第二章の引用文にもあるように、「ノア先生」が「幼少のみぎり」、しかも「エホバ様」に会う前から、すでに「未来の要職を果たすべく訓練」していたのである。「創世記」の記述と同じように、「ノア先生」は生まれながらにして未来の大役を約束されている。

「ノア先生」は自分が「人類の中でもっとも由緒正しく、高貴で」あることを、「唯一無二の教養」である教理に織り込むことで、おのれの生まれ持った人の上に立つ地位と特権を村の人々に強制的に認めさせ、その心に浸透させていく。

確かに文中において「ノア先生」が自分を言及するとき必ず「偉い」や「偉大」という言葉を使っている。その「偉大」さはまず「ノア先生」自身が語るその血筋における高貴さに支えられ、そして権利の大きさをもって体現する。小説冒頭に語り手の「私」は次のように述べている。

ノア先生は偉い人でした。なぜかと言えば、いつも自分で私は偉い人間だといっていたくらいだし、それにあるとき、ほかの友達が偉いというのはどういふことかと尋ねると、それはいろんな役を沢山もっているものことだと先生は答えました。

「いろんな役を沢山もっている」ということは、人々の生活から生死までのすべてを一人で管理すること、究極な独裁統治を意味している。注意せねばならないのは、「ノア先生」が「エホバ様」から認められていることは教理に記されているが、その特権は「エホバ様」から授かったものであることなどは一言も書かれていない。前述したように、「ノア先生」が「いろんな役を沢山持っている」のはその「由緒正しく、高貴」な血筋によるものであり、「エホバ様」から授かったものではない。「ノア先生」は「エホバ様」を祭る身（村には「ノア先生」がエホバを祭る場所も確かにある）でありながら、彼が語る教理の中の「エホバ様」はまるで詐欺師のように「サタン様」を騙し込み、自分に利を持たせるように働かせる。さらにそれをつよく暗示するような文章は、教理の語りにおいて数箇所存在している。代表的なところをあげる。

「サタン様」の提案で「サタン様」と「エホバ様」は各々何もない宇宙で物質をつくる「仕事を始め」たが、「サタン様」は一年目に太陽を作ったのに対して、「エホバ様」は「ただやたらにウロウロあたりをかきまわすだけで、結局何もおつくりにならなかった」。まずその時の二人のやり取りの文に注目してほしい。

「どうしたわけだ！」とサタン様が驚かされると、エホバ様は平然として（諸君、この平然としてという言葉の意味を熟慮されたい！）答えられた。「思索を練っておりました。実は

この仕事、あまり単純なのでする気がしなくなった。(中略)
そこで私は君の物質をちよつぱり分けてもらい、それに加工して特徴を与えることにした。」

「横着な！そのほうがもつと楽で、君の性に合うまいに。」

「いや、充分頭を使っていたよ。そう腹を立てることはある

まい。私は君を不利におとしいれようなどは毛頭考えていない。」

「と言うと、不利にもなりうることだというわけだな。」(傍線部分筆者)

その後「エホバ様」は「サタン様」の非難を尻目に「サタン様」が長い間苦勞をかけて完成した太陽に軽く手を加えたことで、大した苦勞もせずに地球をつくりあげた。引用文で最も注目すべきなのは、「諸君、この平然としてという言葉の意味を熟慮されたい！」という「ノア先生」の注意書きである。「平然」にはどういう意味が込められているのか。単に「サタン様」に問い詰められる時の冷静さを表すものとしても解釈できるが、それならわざわざ注意書きを加える必要もなからう。むしろそれはこれから「サタン様」の成果を利用し、物事を自分に有利に働かせようとする目論見を悟られないために平然を装っている意味と捉えるべきである。従つてこの注意書きは村の人々に「エホバ様」の腹黒さを目を向けるようほめかしている。

同じような表現はその後も一度使われている。地球の管理にうつった「エホバ様」は「サタン様」に地球の地下の管理をさせるために「サタン様」に「アダム」と「イヴ」の生活様子を見せて、その地球に対する関心をうまく惹き付けたあとの記述である。

「しかし、サタン君、」とエホバ様は急に注意深く、しかし表面は何気なく仰言つた。「私はこの観劇を独占しようとは思つていない。それどころか最初から、半分は君の権利だと考えていたくらいだ。しかし、先のこともあるのだし、面倒が起きぬよう、今から所有権を明確にしておく方がよくはないかね。天と地と、君いずれをとるや？」(傍線部分筆者)

親切を装い地上と地下の統治権のどれを選ぶかと「サタン様」に尋ねる時「エホバ様」の表情は「注意深く、しかし表面は何気なく」である。前掲した「平然として」という表現より更にわかりやすく「エホバ様」の狡猾さを暗示している。

その後「エホバ様」はこれから増え続ける死人が魂となり地下にくることを「サタン様」に教え、それに興味を持った「サタン様」を地下に誘導し地上に戻らぬよう封じ込めるわけであるが、閉じ込められた「サタン様」はやつと「だまされた」ことに気づく。

だまされた、と気づいた時はもう遅かった。地面はすっかりエホバ様が固めておしまいになったので、サタン様は出ようにも出られなかった。くやしくて、大声をあげて泣かれたそうじゃ。するとその涙が地からあふれて、エウフラテス河になったのだと。

涙の量が多くて、エウフラテスが氾濫しかけると、エホバ様はまた心配になった。

「エホバ様」は「サタン様」をだまして地上の統治権を手に入れた。洪水を起こすのは「サタン様」だが、そもその原因は「サタン様」をだました「エホバ様」にある。信奉する対象である神エホバは「ノア先生」の教理ではまるで詐欺師のように振る舞い、あげく洪水の原因をつくってしまった。「ノア先生」が本来信奉すべき「エホバ様」のイメージを敢えて落とし、神としての至高性を損なうことに、一体どんな目的があったのか。教理の最後の部分に注目してほしい。

諸弟、諸妹よ、このようなわけで、今もエホバ様はわれわれの日々をたのしく眺めておられるし、サタン様は日々死んでゆくわれわれの数を数えてたのしんでおられるのだよ。ここにバランス、宇宙の調和というものがあるんじゃ。われわれは適当に死ななきゃならん。そして適当に苦しみ、適当に

混乱しなきゃならん。エホバ様とサタン様がなんとか折れ合っているところで、エウフラテスも安泰、諸君も倅せというわけなんだ。

諸君、以上が宇宙のことわり、真理、原則と申すものなり。偉大なるノアの言葉に耳傾けて信ぜよ。しからざるものは死ぬべし！

エホバン国の偉人にして村長、

十二の職を兼ねそなえたる貴人、

ノア述す。

洪水などの災害をもたらすのは「エホバ様」と「サタン様」である。人々が倅せに暮らすには「エホバ様」だけに頼るのでなく、両方をたのしませ、「宇宙の調和」、バランスを保たなければならぬ。そのため、人々は「適当に死ななきゃならん。そして適当に苦しみ、適当に混乱しなきゃならん」。そうすると、調節する役が必要となる。もつとも高貴な血統をもち、いろんな役を持っている「ノア先生」が自ずと一番適任者として考えられる。このような主張が教理の中で直接書かれていないのは、ここに至るまでもや改めて言う必要がないと「ノア先生」が考えているからだろう。「エホバ様とサタン様がなんとか折れ合っているところで、エウフラテスも安泰、諸君も倅せというわけなんだ」という文で、「われわれ」ではなく「諸君」と記しているのは、「諸君」の倅せは自分

〔ノア先生〕が保証し、管理するという意も込められていると考えられる。

そして引用文の最後、「ノア先生」が強く呼びかけ、要求しているのは「エホバ様」を信ぜよではなく、「偉大なるノアの言葉」を信ぜよということである。結局「ノア先生」からすれば自分こそがすべてを超えるものであり、一番「偉大」なのである。

村民たちは「ノア先生」による強制的な刷り込みを受けてその独裁統治に甘んじて、「ノア先生」一族だけを救う方舟まで作り始めた。ところが方舟の建設は途中で放棄され、「ノア先生」一人を残してみんなが村から逃げた。何故なのか。それを究明する前に、まず方舟建設の理由である洪水の到来について考察してみる。

五 洪水という「ノア先生」の幻覚

前に述べたように、「ノア先生」が見た「エホバ様」は幻覚であり、彼が語る天地創造の経緯などはほとんどが作り話、統治するための手段である。従って「エホバ様」から告げられた大洪水の到来もまた「ノア先生」の作り話であると考えられる。実際「ノア先生」の村は「海から遠い」奥地にあり、村の外を十年旅してきた語り手の「私」から見ても洪水が起るかもしれないとされた「エウフラテス」が氾濫する気配は全くないのである（「ちつともエウフラテスは泣きそうにないな」。「創世記」で洪水が起こり、ノアと一族以外の人間を絶滅させたのだが、小説「ノアの方

舟」では洪水は起こらない。

では「ノア先生」はこれを知りながら、なぜありもしない洪水に備えるために方舟を造らせたのか。直接的な記述はないが、語り手の「私」が村から逃走することに関するエピソードに手がかりが隠されている。

ノア先生がだいぶ老いぼれたところ、その自転車の前を、私の父が横切ったのに驚き、思わず手元が狂ってころんだという事件があり、私の父は死刑になりました。

「同じころ、私の妹は」毒薬を「飲まされて」死に、「母」は「絶望のあまり、進んで」毒薬を求めて死んだ。「兄」は「すっかり腹を立て」、「ノア先生」に楯突いたので「死刑にされ」た。「村から逃亡した者は永遠に追放」し、「残った家族をみなころしにする」という「恐ろしい村の法律」はあるが、孤児になった「私」はもはや「恐れる必要がなくなった」ので、逃走を決意し成功したのである。

「ノア先生はだいぶ老いぼれた」。そのため精神も身体も衰え、生活に支障が出ることや、けがをすることも増えてくる。「私の父」のように一寸したことでも「ノア先生」の不快を買ったり、けがをさせたりすることで死刑にされることが増えて、「私」の母の様に絶望する人や、「私」の兄の様に抵抗する人、「私」のように

すべてを失い脱出を試みる人もどんどん出てくるだろう。不安が一層人々の心の中に募り、村全体に蔓延することになる。それを押さえ込もうとして、無論「ノア先生」の統治もますます残酷なものとなる。老いた「ノア先生」は統治の限界を感じ、アルコール依存がもたらした幻覚や妄想もエスカレートしていくと考えられる。

洪水の到来というのは、作者安部公房も述べたように「発狂しうらぶれ果てた彼の幻覚」¹⁶（第一章で引用されている）であり、絶望的な心境から生まれた世界破滅の妄想である。この「ノア先生」の精神状態の変化について直接の記述はないが、「私」とのやりとりの中から推察することができる。

村を訪れた「私」のことを「ノア先生」は「旅の方」と認識している。にもかかわらず「私」に洪水と方舟のことを話すときに、何の説明もせずに、

「サタン様がうたがわれたんじや。魂なんか無いんじやなかろうかとな。やはりエホバ様にだまされたんじやなかろうかとな。それでな、エホバ様がいくらなだめても、サタン様はもう泣き止まないことに決めたんじや。泣いて泣いて泣きつくし、エウフラテスを氾濫させて、世界を大洪水におぼれさせることにきめられたんじや。」

と「サタン様」や「エホバ様」、「宇宙の調和」など教理のことを熟知するものでなければ決して理解できないことを「一気に吐き出」す。また方舟がまだできていないことについて、「ノア先生」は次のように語る。

「その方舟はまだ出来んのじや。サタン様は待ちくびれただろう。エホバ様にも申しわけない。おろかもめ、世界の破滅じや。」

また「ちつともエウフラテスは泣きそうにないな」という「私」の言葉に「ノア先生」は次のように答えた。

「約束したからじや。方舟ができるまでとエホバ様に約束したからじや。方舟がもう見捨てられたとお知りになったら、おお、サタン様はどうなさるじやろ。」

「ノア先生」は自分の妄想に完全にとりつかれ、世界の破滅を本気で嘆き、絶望している。彼がかつて語った教理は、幻覚や妄想の部分もある一方、独裁統治を容易にさせるための手段であり、意識的に造られたものである。結果を見ても村民を統治する有効手段として成り立っている。しかしその幻覚がついに酷くなって、「ノア先生」の精神はいよいよおかしくなってしまうと、洪水の到

来を本気で信じ、方舟を造らせて結局自分の統治を自ら崩壊させた。

作者安部公房の言葉でいうと、彼は「方舟思想を風刺するため」に「ノアの方舟」を書いた。前述したように、「方舟思想」とはノアが選ばれるものとして彼とその家族だけが洪水から逃れる特権を持っているという考えである。それを風刺するために安部は「創世記」での聖人ノアを「アルコール中毒の独裁者」の村長「ノア先生」に「仕立て」た。その「ノア先生」が村を統治する手段としてつくった教理もまた「創世記」の内容と大きく異なるもので、洪水も「創世記」で書かれるように、エホバが人間の悪に悲しみ、「地の上に人を造つたのを悔いて、心を痛め」て起こしたのではなく、「発狂しうらぶれ果てた」「ノア先生」の幻覚・妄想でしかなかった。

注意せねばならないのは「私」に方舟のことを聞かれた時、「ノア先生」は「あれが有名なノアの方舟じゃ」と答えたが、無論それは決して「創世記」に書かれる「方舟伝説」のことを指しているわけではない。すでに発狂した「ノア先生」が洪水のことや方舟のことを周知のことだと妄想しているだけだと考えられる。

その証拠に、村から離れて十年も旅してきた「私」は再び「ノア先生」に会う前に方舟のことを知っていたというような記述はない。「私」がはじめて方舟の存在を知ったのは村に帰ったときで（「私がいたころにはなかった」、方舟を見た「私」は「驚いてし

ま」って、「海から遠い、こんな奥地で、こんな大きな船を、いったいどうする気だったのでしょうか?」と困惑している。その後さらに方舟を観望し、「この船が、村の荒廃と深い関係があるにちがいない」という推測までたどり着いたが、「ノア先生」の方舟であることに気づいていなかった。つまり「ノア先生」にまつわる方舟伝説というものは、少なくとも「私」が「ノア先生」と再会する時にはまだなかったと考えられる。

では小説「ノアの方舟」で肝心な方舟については「創世記」における伝説の記述とどう違うのか。次章はそれを検証した上で小説で「方舟思想」がどのように表現されているのかを浮き彫りにする。

六 方舟の建設に見られる「方舟思想」

まず方舟の形から考察してみよう。「ノアの方舟」における記述は次のようである。

高さが三十メートル近くもあり、長さが百メートル以上もありそうな、まるで捕鯨船みたいな船を、ノア先生がエウフラテスに浮かばせようと考えたともいうのでしょうか。それではまるで、エウフラテスをせきとめようとするようなものです。

「創世記」では、方舟の大きさ、構造から中に入れるものまですべては神エホバによって決められていて、ノアはあくまでそれに従って造っただけである。大きさについては、「長は三百キュビト其潤は五十キュビト其高は三十キュビト」¹⁸、換算するとおよそ長一三・五メートル、幅二二・二メートル、高一三・三メートルとなる¹⁹。安部公房の「ノアの方舟」での方舟はまだ建設途中であるが、その大きさはすでに「創世記」での方舟を超えている。「創世記」でのほうは充分大きいものであるが、それほど大きい船を必要としたのは、大洪水に耐えるためであり、またノアとその家族のほかに「生物總て肉なる者」を二つずつ収容してさらにそれら生きものを含む全員の食料を保存するためである²⁰。

つまりエホバがノアに巨大な方舟を造らせる目的は、おもにエホバへの信仰心が最もあついノアとその一族を、洪水によって地上にはびこる墮落が一掃された（ノア一族を除く全人類が死ぬ）後の新時代に「新種族をつくる聖き種」として守るためと²¹、ほかの生きものの種族保存のためである。

では小説「ノアの方舟」において、方舟を造る目的はなんだろうか。改めてその部分に注目する。

「サタン様」がいくら待っても死人の魂が見えないので、「エホバ様」に本当にだまされたとおもしろい、「泣きつくし」でその涙で全人類を「ことごとく溺死させ」ようとしている。「エホバ様」は洪水に「耐える方舟をつくるだけの間を」待つように「サタン様に」

頼み、了解された。方舟を造る目的については「エホバ様」が「一つの家族だけを救う」ためであるとされている。この「一つの家族」は言うまでもなく「人類の中でもっとも由緒正しく、高貴で偉大なノアの家族」のことであり、他のものを救うことについて全く触れていない。そもそも以上のことはすべて「ノア先生」の妄想であり、従って方舟建設の実質的な目的は「ノア先生」が自身とその家族だけを守るためにある。それに対して「私」は反論し、「ノア先生」がまたその反論をはじき返した。

「しかしあなたの家族だけが救われたって、他の人間にとつては、やはり世界の破滅であることに変わりないじゃありませんか？」

「いやいや、（中略）いずれ死ぬ身ではないか。宇宙調和のために死ぬことに何の不平がある。わしは方舟の中に、彼ら（筆者注：村民たち）の生活を跡づける数々の資料を入れる部屋をもうけてやった。彼らの存在はそれで、彼ら自身以上は後世に伝えられるはずじゃないか。」

「ノア先生」がつくった教理では、人々は「宇宙調和のために」「適当に死ななければならぬ」ない。この大義名分のもとで「ノア先生」は人々を「適当に死」なせる立場にいた。そして大洪水という彼の妄想の中で、当たり前のように、彼とその一族だけが死か

ら免れ、それ以外すべてのものは死ぬ。そもそも洪水は「サタン様」が流す涙によるもので、「サタン様」が「泣きつ」けば気が静まり、「宇宙調和」はまた保てる。「ノア先生」からすれば、自分は誰よりも偉く、「エホバ様」に認められ守られている。本来村長として村民を守る立場にいた彼は、全員が洪水に溺れ死ぬことについてむしろ教理にかなうものとして、自分だけが助かることと同じように疑う余地もなく、村民ならば当然受け入れるべきだと考えている。自分がわざわざ方舟の中に村民のために「生活を跡づける数々の資料を入れる部屋をもうけてやった」と「ノア先生」は自身の村民に対する優しさを主張しているが、村民たちの記録を残すだけでは無論救うことにならない。角度を変えて考えると、この言葉はまた「ノア先生」は「エホバ様」の事細かな注文に従って方舟を造ったのじゃなく、自分の意思で造ったことの裏付けである。

「創世記」でエホバは人類の墮落を見て、すべてを消しやり直すための洪水を起こす。ノアはその篤い信仰心のため、彼と彼の一族が方舟によって守られた。ノアはエホバの命に忠実に従って方舟を作り上げ、洪水後の新時代をつくる役目を託された。安部公房の「ノアの方舟」で「エホバ様」はあくまで「ノア先生」の幻想であり、その統治を正当化するために持ち出される。洪水も心身と統治の限界に苛まれ発狂した「ノア先生」の幻想であって、その幻想の中で方舟の案は確かに「エホバ様」が言い出したのだ

が、その実は「ノア先生」が自分と一族を守るために自分の意思で方舟をつくった。

世界を絶滅させる大洪水、洪水を乗り切るために造られる巨大な方舟、ノアとその一族が神エホバに認められ唯一洪水から免れる権利をもっている、「創世記」におけるノア伝説と小説「ノアの方舟」での当該部分は以上の点で類似している。そして両者もつとも異なる点といえば、小説「ノアの方舟」での洪水は「ノア先生」の幻想で、その洪水から自分一族だけを救うことも方舟を造ることを決めたのも神「エホバ様」でなく「ノア先生」の意思によるというものである。

第一章で取り上げたように、作者安部公房はノアとその一族だけが洪水から逃れる特権をもつという考え方「方舟思想」が「倫理的普遍性」を持ち得たのは、人類の墮落とノアの信仰心である。そのため安部は「ノア一家を除いた全人類」を否定する「方舟思想」を「一種の道徳上の弱肉強食説」と批判している。興味深いことに安部の「ノアの方舟」では人類の墮落もノアの信仰心も描かれず、しかも淘汰を行ったのも「エホバ様」でなく、ノア本人である。それでも「ノアの方舟」での「方舟思想」は「一種の道徳上の弱肉強食説」として考えられる。

「ノア先生」は「人類の中でもっとも由緒正しく、高貴で偉大」であるため村民の命を自分の意思で奪うことができるほど村の頂点に立ち、沢山の特権をもっている。しかもそれが村における唯

一の行動原則、道徳を説く教理にも定められている。こうして考えると、「ノア先生」と村民の絶対的な強弱の差をさだめた教理そのものが「方舟思想」を表しているものであり、「ノア先生」が行ってきた独裁統治とは「方舟思想」に基づいたもので、村民たちもそれに従っている。後に「ノア先生」が発狂し、村民たちに自分と一族だけを救うための方舟を造らせたことの裏に言うまでもなく「方舟思想」がもつとも明確に読み取れるが、「ノア先生」の考え方も行動原則も最初から最後まで教理から離れていなかった。「ノア先生」の独裁統治を論理的に支えていたのも、最終的に統治を崩壊に導いたのも「方舟思想」である。

しかし注意せねばならないのは、教理は村内部という閉鎖的な空間では通用するが、村の外の人間、あるいは一般常識をもつ読者からすればあくまで荒唐無稽で普遍性を持たない、独裁者の論理ではない。

つまり安部公房が書いた「ノアの方舟」における「方舟思想」の合理性は「ノア先生」が統治する村に限定されているということである。安部は、「創世記」における「方舟思想」をいったん崩して、誰にもその不合理さが分かるような「道徳上弱肉強食説」として再構成させたのである。そして作品において方舟建設の経緯を記し、「方舟思想」の理不尽さを伝える役目は、建設に直接関わる村民ではなく、村と全く無関係な外来者でもない、元村民で村から十年離れた「私」に託されている。その意図はどこにある

のか。

七 「私」という批判者

まず第四章の最後で触れた問題点である、長年「ノア先生」の統治に従ってきた村民たちはなぜ途中で方舟の建設を放棄し逃げ出したのか、を解明したい。

もう一度「私」と「ノア先生」の次の会話に注目してほしい。

「しかしあなたの家族だけが救われたって、他の人間にとつては、やはり世界の破滅であることに変わりないじゃありませんか？」

「いやいや、(中略)あのおろかもめらも、みんな同じようなことを言いおったわい。」

「私」は村から逃れて十年経ってまた還ってきた。その時見た村は「廢墟と化した無人の村」、「建造途中で放棄され」た方舟と老いぼれた「ノア先生」一人だった。

長い間村民たちは「ノア先生」とその教理に従って何とか暮らしてきた。そして彼らは大洪水の到来という「ノア先生」の言葉までも信じていた。だからこそ「ノア先生」一族だけを助けるための方舟を造りはじめた。しかし自分たちが建設を進めば進めるほど、逆に「ノア先生」一族を除いた「世界の破滅」が近づいて

くる。ついにそのような未来が迫ってくることに耐えられなくなって逃げ出したのである。従って直接の記述はないが、村民たちが途中で方舟の建設を投げ捨てた根本的な理由は、彼らが「ノア先生」の教理の不合理さに気づいたのでなく、「世界の破滅」、死に対する恐怖と絶望であると推測できる。

このような恐怖と絶望を、村に帰るまで方舟の存在すら知らなかった「私」が感じるはずはない。しかし「私」は「ノア先生」から方舟のことを聞いてすぐ村民たちと同じような反論を出した。つまり「私」は村民たちと違う意図で「ノア先生」に反論を投げかけたということである。その意図を解明するには、まず改めて「私」が十年の旅の間何を経験してきたのか、なぜ村に帰ったのかということを整理する必要がある。

外に出た当時、何も彼も珍しく、目新しく、夢中になって多くのことを知ろうとしました。村よりも悪いことから、良いことまで、ずっと進んだことから、ずっと遅れたことまで、かまわず一緒くたに噛み砕き、飲み込んでしまいました。そして、随分ながいことかかって、方々の国を訪ね歩き、やっと少しずつ合理的なものの考え方を身につけることができるようになりました。

十年の月日が流れました。
突然私は村に帰ってみようと想い立ちました。そう想い立

つと、永年おさえていた懐かしさと憎しみが、せきをきったようにあふれだし、一刻もしんぼうでなくなりました。

村のことと叩き込まれた教理のことしか知らなかった「私」は、脱出することで「ノア先生」が統治する閉鎖的な空間からやっと解放され、あらゆる新しいものを貪欲に吸収していく。そのうち「やっと少しずつ合理的なものの考え方を身につけることができるように」なった。すなわちそれまで村の教理でしか物事を考えることができなかった「私」は、やっと一般常識をもちえたと同時に、ものを自分の目で観察し、それは村のものとは比べて「悪い」か「良い」か、「ずっと進ん」でいるか「ずっと遅れ」でいるのかを自分の頭で論理的に分析し判断できるようになった、ということの意味する。そうになると、それまで信じてきた「ノア先生」の教理がどれほど合理性に欠け、理不尽なものかは自然と分かってくる。

そして十年が経ち、ある拍子に「突然私は村に帰ってみようと想い立」ち、「永年おさえていた懐かしさと憎しみ」に突き動かされるまま村に帰った。ここでいう「懐かしさと憎しみ」とは何か。単に昔への懐かしさと自分から家族を奪った「ノア先生」への憎しみだけではない。その感情の中には懐かしさから生まれる今の村の状況に対する好奇心、憎しみから生じてくる教理の中の不合理さと理不尽さを暴き出したいという思いが同時に交じっている

と考えられる。

「私」と「ノア先生」の最初の会話に注目してください。

「随分さびれた村ですねえ。」

「さよう、おろかな村民どもの仕業じゃよ。おろかな、おろかな、おろかもめ。」

「あの船は、いったい何ですか？」なぐりつけてやりたくなるのをこらえながら、私は白っぽく尋ねました。

村民のことを「おろか」と連呼する「ノア先生」に、「私」の中の憎しみの感情が一気に沸いてきたが、それを敢えて「こらえながら」、方舟のことをたずねた。第五章で述べたように「私」は方舟の存在を知ったのは村に帰ってそれを見たあとで、「白っぽくれて」というのは決して「あの船」が「ノア先生」の方舟であることをすでに知っていたのを隠したという意味ではない。「ノア先生」に尋ねるまえに船の観察でえられた認識、すなわち村が「さびれた」のは目の前の船と「深い関係がある」という考えを持ちながら、船のことや村の荒廃について詳しく知りたいために敢えて聞いた、という意味であると考えられる。

そして方舟のことについての説明を「ノア先生」が「一気に吐き出し」た後、「私」と「ノア先生」の問答が始まる。

「しかしあなたの家族だけが救われたって、他の人間にとつては、やはり世界の破滅であることに変わりないじゃありませんか？」

「いやいや、」と、私の意地悪い調子など一向にこたえぬらしく、急にせき込んで、「(中略) いずれ死ぬ身ではないか。宇宙調和のために死ぬことに何の不平がある。(中略) それに、方舟をつくる仕事の間、わしは彼らにちゃんと食事を与えてやった。(中略) 何なのために不平を言うのやら、とんと分からぬ。」

「その食事の費用は、村民の税金から出したんでしょ。」

「むろんじゃよ。私は村長じゃったからな。」

「それじゃ、彼らは、自分で自分の食費を支払っていたのと同じじゃありませんか。」

「うん、うん、そうじゃ。しかし、そういうもんなんじやよ。なに、いずれ洪水が来りゃ、死んでしまうのだから、そんなことはどうでもよかつたんじや。それを奴らはいやだと言っておった。おろかなやつらじゃ。なあ、虫けらじゃなあ。」

「ちつともエウフラテスは泣きそうにないな。」

「約束したからじゃ。方舟ができるまでとエホバ様に約束したからじゃ。方舟がもう見捨てられたとお知りになったら、おお、サタン様はどうなさるじゃろ。」

本稿ですでに取り上げた部分もあるが、全体の流れを把握するために、もう一度引用する必要がある。最も重要なのは「私」が投げかけた質問の裏にある意図である。

十年外の世界を旅して、「合理的な考え方」を身につけた「私」はむろん「ノア先生」の言う「エホバ様」のことや洪水のことなどすべては作り話、幻想であること、そして「ノア先生」のつくった教理の不合理さを最初から知っているはずである。従って、「私」が「意地悪い調子」で投げかけた最初の質問で批判しようとしたのは、「ノア先生」の一族だけが助かり、それ以外の人は死ななければならぬ、という「方舟思想」の不合理さ、理不尽さであると考えられる。また最初からこの質問をしたということは、「私」がもつとも批判したかったのは「ノア先生」が興奮気味に語った洪水に関する幻想の荒唐無稽などではなく、「方舟思想」であったことが窺える。

しかし「ノア先生」はこれに「一向にこたえ」た様子もなく、彼からすれば、村民たちはいずれ洪水で死ぬ運命にあり、洪水が来るまでの間、彼が村民を管理し食事を与えていたから不満を言われる筋合いがない。これに対して「私」は立て続けて二問を投げかけ、反論した。要するに「ノア先生」は村民たちに彼と一族だけのために方舟の建設を要求すると同時にいつものように重い税金も徴収していたが、食事という最低生活保障しか与えていなかった。「ノア先生」の村民に対する独裁統治の不合理さを鋭く指

摘することで、「私」は「ノア先生」が持つ村民を使役する特権に正当性がないことを間接的に批判している。

「私」のこの問い詰めに對して、「ノア先生」は「うん、うん、そうじゃ」と渋々認めながら、「いずれ洪水が来りゃ、死んでしまうのだから、そんなことはどうでもよかったんじゃ」と言っていて、村民たちがいずれ洪水で死に自分と一族だけが助かる特権をもっているという「方舟思想」を頑なに守ろうとする。結局「ノア先生」は村民のことを「愚かなやつら」「虫けら」としか考えていなかった。

これを受けて「私」は更に「ノア先生」を追い詰める。「ちっともエウフラテスは泣きそうにないな」という「私」の言葉は、洪水は起こらないという確実な現実から「ノア先生」の主張する洪水の到来は幻想にすぎないということを強く示唆している。これは間接的に洪水の到来と深く関わる「ノア先生」の教理、ひいては「方舟思想」への否定を意味する。このときの「ノア先生」はすでに自分の幻想を現実と認識しているため、「私」の質問の意図に気づくはずもなく、ひたすら方舟が完成できないことを嘆き絶望する。

二人の問答はここで終わり、「私」は「村を永久に去ることにし」た。結局「ノア先生」は「私」の質問責めで自分の統治方法にある不合理さを認めながら、教理の内容や洪水の予言、そして「方舟思想」などについての誤りを認めなかった。「私」があえて

質問をつづけなかったのは、それまでの問答で、「ノア先生」の主張の不合理さ、理不尽さを「私」は再認識することができたためであり、また「ノア先生」がすでに自分の幻想に完全に寄り憑かれていることを「私」が気づき、そのような「ノア先生」にこれ以上問い詰めるのは無意味であると考えたためであろう。

「私」は最後まで「ノア先生」の主張を批判しつづけることができたのは、「私」はすでに「ノア先生」の教理の束縛から解き放たれているためである。元村民であった「私」は「ノア先生」の統治の仕方をよく知っていて、しかもそれを合理的に批判することができる。これこそは作者安部公房が方舟建設の経緯を記し、「方舟思想」の理不尽さを伝える役目を「私」に託した意図であると考えられる。

そして「私」の次の言葉で作品が完結する。

私はノア先生を見捨て、方舟を見捨て、そして村を永久に去ることにしました。今となって、私にねがえることはただ、この愚かなアル中患者に関する伝説が、せめて誤り伝えられぬことをねがうだけでした。

懐かしんでいた村の風景は「すっかり変わり果て」て、憎しみの対象であった「ノア先生」もまた一人だけ村に取り残され、「発

狂しうらぶれ果て」た。村に対して未練を感じる理由はもう存在しないと考えられる。「ノア先生」との対話で村の変化や方舟にまつわることを知り、「ノア先生」との問答で「ノア先生」の統治方法、教理内容、そして「方舟思想」の中の不合理さ、理不尽さを改めて深く感じ取り、それを批判した。「ノア先生」が発狂し幻想に完全に寄り憑かれているため「ノア先生」の主張の非を徹底的に論破し、彼に認めさせることを「私」はしなかったが、当初村に帰ることを思い立たせた目的はほぼ達成したと言える。村への未練を感じなくなり、目的もほぼ達成した「私」は「ノア先生を見捨て、方舟を見捨て、そして村を永久に去ることにし」た。

作品の最後で「私」は「ノア先生」の伝説が「せめて誤り伝えられぬこと」、言い換えれば真実を人々に知られることを「ねがう」と記している。この真実とは作者安部公房が「私」の語りをかりて伝えようとしたことである。この「創世記」の「方舟伝説」から大きく書き換えられた「新方舟伝説」を通して、「創世記」の「方舟伝説」にある「方舟思想」の実質、「一種の道徳上の弱肉強食説」であること、不合理で理不尽なものであることを、安部は読者に訴えかけている。小説「ノアの方舟」とは「方舟思想」への批判である。

おわりに

本稿の冒頭に述べたように小説「ノアの方舟」という作品は、

安部公房が長らく強い関心を持っていたノアの伝説に対する考えを新たにまとめたもので、その研究価値は大いにある。にもかかわらず、これまではほとんど注目されていない。

安部公房自身が述べたように、彼は「創世記」での聖人ノアを「アルコール中毒の独裁者」の村長「ノア先生」に「仕立て」、あらゆるいきものを絶滅させた大洪水を現実存在しない彼の幻想にした。「創世記」での「方舟伝説」のイメージを反転させて書いたようなこの「新方舟伝説」を通して、安部が訴えようとしたのは「方舟思想」への批判である。

「方舟思想」とは「創世記」でのノアが選ばれるものとしてノアとその家族だけが洪水から逃れる特権をもっていることを肯定する考え方で、安部はその本質を「一種の道徳上の弱肉強食説」と捉えた。小説「ノアの方舟」において、「方舟思想」は「ノア先生」と村民の権力の絶対的な強弱の差を肯定するもので、「ノア先生」の独裁統治を論理的に支えていた教理から、最終的に統治を崩壊に導いた「方舟事件」までを貫くものとして「新方舟伝説」の物語を突き動かす。

そして語り手を「方舟思想」と深く関わる村の教理を熟知している上に、それを批判できる「合理的なものの考え方」をもっている元村民である「私」にすることで、「方舟思想」にある不合理さ、理不尽さを暴き出し批判することができた。

本稿はこれまで注目されていない安部公房の短編小説「ノアの

方舟」のテキストを考察することで、その中から安部公房の「創世記」におけるノア伝説にある「方舟思想」に対する批判を読み取った。これをもって、改めて安部が一年前に書いた「S・カルマ氏の犯罪」や「洪水」に登場するノアのエピソードを分析し、総合的に比較することで必ず新たな発見が期待できよう。

注

- (1) 『21世紀に安部公房を読む水の暴力性と流動する世界』勉誠出版、平成二十八年六月。
- (2) 注(1)に同じ、九十八頁。
- (3) 注(1)に同じ、一〇五頁。
- (4) 「方舟思想」——映画『生きものの記録』『ギネマ旬報』、昭和三十(一九五五)年十二月(『安部公房全集5』新潮社、平成九(一九九七)年十二月、三六九頁)。
- (5) 「ノアの方舟」『安部公房全集3』新潮社、平成九(一九九七)年十一月、一五九頁—一七一頁。
- (6) 「創世記」第六章第九節(『文語訳旧約聖書』日本聖書協会 昭和二十五年(一九五〇)年)。
- (7) 注(4)に同じ、三六九頁—三七〇頁。
- (8) 「ヘブル人の書」第十一章第七節(『文語訳新約聖書』日本聖書協会 昭和二十五(一九五〇)年)。
- (9) 注(4)に同じ、三七〇頁。
- (10) 注(4)に同じ、三七〇頁。
- (11) 「箴言」第二十章第一節、注(6)に同じ。
- (12) 「箴言」第二十三章第二十節—第二十一節、注(6)に同じ。
- (13) 「箴言」第二十三章第二十九節—第三十五節、注(6)に同じ。
- (14) 「猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警

む。斯かることを行ふ者は神の國を嗣ぐことなし。」〔ガラテヤ人への書〕第五章第二十一節、注（8）に同じ。

(15) 「創世記」第五章（注（6）に同じ）。

(16) 注（4）に同じ、三七〇頁。

(17) 「創世記」第六章第六節（注（6）に同じ）。

(18) 「創世記」第六章第十五節（注（6）に同じ）。

(19) 1 キュビトを約 4.5cm として換算する。

(20) 「然じ汝とは我わが契約をたてん汝は汝の子等と汝の妻および汝の子等の妻とともに其方舟に入るべし。又諸の生物總て肉なる者をば汝各其二を方舟に繋へいりて汝とともに其生命を保たしむべし其等は牝牡なるべし。鳥其類に従ひ獸其類に従ひ地の諸の昆蟲其類に従ひて各二汝の所に至りて其生命を保つべし。汝食はるる諸の食品を汝の許に取て之を汝の所に集むべし是即ち汝と是等の物の食品となるべし。ノア是爲し都て神の己に命じたまひしごとく然爲せり」〔創世記〕第六章第十八節、注（6）に同じ。

(21) 馬場嘉市『旧約聖書注解創世記（上）』日曜世界社、昭和十二（一九三七）年十月、一五五頁。

Kobo Abe's View on *Noah's Ark*

—Focus on a Critique of the Arkism

GU Qiyuan

Noah's Ark is a short fiction written by Kobo Abe and published in the January 1951 issue of the “Gunzo” magazine. This novel relates how the narrator “I” lived in a village, which was strictly ruled by the village head Noah. After losing my family to Noah’s tyranny, I escaped from the village. When I returned to the village, I saw the ruins, the lonely Noah and the abandoned half-built ark and after a last conversation with Noah, I resolved to leave the village forever.

Although this novel has not received public attention to date, it can be seen as the author’s new summary of the parashah *Noach* in *the Book of Genesis*, which Abe focused on in the long term, which makes it valuable in terms of literary research.

As Be mentioned in his comments, Kobo Abe wrote *Noah's ark* to criticize “the Arkism” — Noah was chosen by God, so only he and his family had the privilege of surviving the flood. In this article, I will analyze the novel *Noah's ark* in detail: to illustrate the image of “Noah” created by author Kobo Abe, analyze how he destructured the old Noah tale, created the new tale of the Ark and criticized “the Arkism”. It also paves the way to re-interpret this story.

キーワード：「新方舟伝説」(new legend of the Ark)、アルコール中毒者 (alcoholics)、独裁者 (dictator)、方舟思想 (the Arkism)

